

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詞華集日本漢詩

第九卷

詞華集 日本漢詩 第九卷(第II期第二回配本)

昭和五十九年六月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川英郎

松下 野正巳

解題 松野 下 正 巳

発行者 坂本健彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102

東京都千代田区飯田橋二丁目五番四
電話(三六)九六四 振替東京五二五〇三五

©一九八四

解題

松下忠

停雲集

ていうんしゅう 新井白石輯録の漢詩集。享保三年（一七一八）成立刊行。成立の頭初から二巻本で、江戸時代の作者二十四名、作品二百六十一首を収めている。

一 諸本

㊦ 東大史料

㊧ 享保三版―宮書・神宮・尊経・陽明

享保一二版―国会鸚軒・静嘉・九大・京大・慶大・早大・東大・東北大狩野・日比谷加賀・栗田・竹清・学書言志

安永七版―国会・国会鸚軒・内閣・早大・茶図成實

刊年不明―刈谷

㊨ 新井白石全集六

（国書総目録による）

底本には享保十二年版の家蔵本を使用した。安永七年版には新たに目録一丁が附されているが、再治本の扉にある

大阪宝文堂書林の本敬寛(不詳)の識語によると、此の集の編次は詩体別にせず作者別にしたが、最近錯乱が甚しいので旧本に当り、作者目次を附したとある。

二 内容の構成とその特色

上下二卷二冊、識語の通りで、上卷は室師礼(鳩巢)に始まり、山順之(堀山順之、順之は字、字を以て通行。)に至る作者十二名、作品百四十六首、下卷は高子新(深見玄岱)に始まり釈若霖に至る作者十二名、作品百十五首、合計すると、作者二十四名作品二百六十一首を収める。下卷は田伯鄰(益田鶴楼)が、享保三年戊戌秋八月に撰した「新刻停雲集跋」で終る。跋には編纂の当初から二卷本であったことが明記されている。

三 編纂の目的意図

上卷所収の「停雲集凡例」によると、「停雲」と名付けたのは、陶靖節(淵明)が親友を思ふ詩「停雲并序」(汲古書院刊、和刻本漢詩集成補篇十七輯、陶靖節集卷之一卷頭)によつて思い立ち、交友の詩のうち、梓行されて世に伝わっているのを除いて載せたといっている。

四 編著者 新井白石

白石(一六五七—一七二五)の名は璵、又の名は済美、字は行、又是在中、通称は与五郎、また与次右衛門、号は白石・紫陽・錦屏山人・天爵堂・勿齋・桐蔭。木下順庵の高弟で、徳川時代屈指の大儒であり、博く中外の典故に通じていた。幕府の儒官となり、享保十年(一七二五)歿した。年六十九。以上が伝記の要約である。伝記資料としては、「先哲叢談」卷之五源君美、五弓豊太郎編「事実文編」二十九(第二冊)に、室直清撰「朝散大夫筑後守源公碑銘」、板倉勝明

撰「白石新井先生伝」、青山延光撰「新井白石伝」、太宰純撰「記新井白石事」等があり、新井家の事を述べた白石自撰の「新井氏族志」「新井家系（一本家譜）」がある。この詞華集第四巻にも、「熙朝詩薈（一）」巻三十に伝記と作品が収められているので、これから要点を抄出し、書下して示す。

新井君美、字は在中、一の字は濟美。本姓は源氏、稱は勘解由、初名は璵、白石と號し、又錦屏山人と號す。江戸の人なり。生れながらにして（而）岐嶷聰慧なり。三歳字を寫し、六歳書を誦し、既に長ずるや器資宏偉、經綸を負ふに方つては、恰聞多識、倭漢古今の典故に通曉す。木下順菴に従ひて學ぶ。順菴薦めて甲斐の府に仕へしむ。文昭大君入りて大統を繼ぐに及び、従ひて大府に升る。從五位下に叙せられ、筑後守に任ぜらる。眷遇最も盛んなり。年六十九、享保十年に卒す。少くして大志有り。常に自ら誦して曰く、大丈夫生れて封侯を得ず（不）んば、死して當に閻羅と爲るべしと。祇南海哭詩を作りて云ふ、生れて聖世に逢ふ、應に恨み無かるべし。死して閻羅と作る、爲す有るに足ると。蓋し其の平生の言を記すなり（也）。著書は甚だ富み、凡そ一百六十餘種、近古罕に見る所なり（也）。（以下諸儒の評語が有るが省く。）

著書のうち、白石の特色を示す対外関係のもの的一部と日記・詩文集とを抄出する。

- 新井白石朝鮮聘使待遇建言案 一冊 ○鷄林來聘記 十二卷五冊 ○新井白石日記 十六冊 ○異称日本詩
⑤一冊 ○新井白石先生詩集 三卷一冊（国書総目録による。）

新井白石の詩風詩論については、拙著「江戸時代の詩風詩論」の中篇各論の第二章第一節其二を参照されたい。項目を示すと、一、詩人としての白石 二、唐詩鼓吹と格調説主張 三、明詩鼓吹 四、白石と護園派詩論との関係。

皇朝正声

こうちようせいせい 一卷一冊。荻生徂徠編著、明和八年（一七七二）に成立し刊行された。輯録されている詩人は十

五名、詩篇は三十五首、附録として僧侶機先の詩一首「長相思」を収める。これは二百一字より成る長篇の古詩である。

一 諸本

⑤国会（徂徠叢書の内）国会鶚軒（天保一五写）・多和

⑥国会・国会鶚軒（一冊）（残菊詩篇・水石亭詩卷・伝疑小史を付す）・内閣・慶大・東大・東北大狩野・阪大・日

比谷加賀・北野・無窮織田・神習・旧下郷・延岡内藤家・学書言志・中山久四郎

（国書総目録による）

底本には、国立公文書館内閣文庫本を使用させていただいた。

二 内容の構成とその特色

十五名の排列は、大友皇子・河島皇子・大津皇子の三皇子を初めにおき、平城天皇を九番目に、嵯峨天皇を十三番目においている。採録された詩篇の数から見ても、嵯峨天皇の十七首が最も多く、次は大津皇子の三首であるから、この排列についての意図が不明である。

三 編纂の目的意図

編纂者の徂徠は、編纂の目的意図を明示していないが、徂徠が希望して「叙」を求めた宇世璠即ち片山兼山（兼山は一時期宇佐美瀧水の養子となったので、宇世璠とも云う。）の「皇朝正聲叙」が代弁していると理解してよいであろう。「叙」によると、文章（ここでは詩という意味）について「文章ハ氣運ニ關ハル」とし「風雅之正ヲ得ルニ在レバ」（何れも原漢文）によって得られるものではないから、「自然之致」を具備することは才学を以てしては奈何ともすることは出来ない。

しかし詩を学ぶものは「風雅之正ヲ得ルニ在レバ、則チコレ（之）難キコト末シ」（原漢文）という詩観を以て、詩の模範を示そうとして編纂されたものである。

四 編著者 荻生徂徠

徂徠（二六六―一七二八）は、日本における古文辞学派を代表する人物である。五代將軍綱吉の時大老格となつて權勢を恣にした柳沢吉保に仕えて手腕を發揮した。本姓は物部、名は雙松、字は茂卿、徂徠は号、その他に護園・赤城翁とも号し、中国風に「物徂徠」と呼ばれる。あらゆる人名事典に載っているが、基礎資料としては「先哲叢談」卷之六や、五弓豊太郎編「事實文編」三十一（第二冊）には、太宰春台撰の「郡山故記室荻生先生墓誌銘」、板倉勝明撰「徂徠荻生先生伝」、錢梅溪撰「徂徠伝」があり、この詞華集にも第五卷「熙朝詩薈（二）」卷四十に伝記と作品百三首が収められている。伝記の要点を書下し文に改めて示すと、

名は雙松、避くる所有りて、字を以て行はる。荻生氏は江戸の人。其の先は三河の荻生の人。本姓は物部、自ら大連守屋の後と言ふ。摠右衛門と稱し、徂徠と號す。母歳首に遇り松の枝を以て門に插むと夢みて生む。故に雙松と名づく。……初め程朱の説を奉じ、後に挺然として一家の見を立て、痛く性理を駁し、併せて仁齋を攻む。又明の李王に倣ひ、古文辭を修む。……其の學は汪洋浩博、雅樂象胥自り、軍旅法律等に至るまで精核ならざるは莫し。……柳澤公を以ての故に屢々常憲大君に見え、經史を辨論し、賜はるに葵章の衣服を以てせらる。享保六年、有徳大君、命じて清主の六諭衍義に句讀せしむ。成るに及んで亦衣服を賜ふ。十二年大君特に之を召見せらる。蓋し異數なりと云ふ。享保戊申正月十九日卒す。年六十三。是の日天大いに雪ふる。終りに臨んで人に謂ひて曰く、海内第一流の人物茂卿將に命を隕さんとす。天爲に此の世界をして銀たらしむと。……毎に自ら言ふ、熊澤之知、伊藤之行、之に加ふるに我之學を以てすれば、則ち東海に始めて一聖人を出さんと。

著す所の書凡そ數十部、皆世に行はる。(以下諸家の評がある。省略する。)

五 徂徠の古文辞説

右の伝記の中に「又明の李王に倣ひ、古文辭を修む。」とあるが、徂徠の古文辭は中国の李・王の古文辭とは内容を異にしている。李・王を批判して、

李王二公ハ世ヲ歿スルマデ、カヲ文章之業ニ用ヒテ、經術ニ及ブニ遑アラズ。然レドモ不佞ハ其ノ學ヲ藉リテ、以テ經術之一斑ヲ窺フヲ得タリ。(學則附錄)(原漢文、以下同)

と云い、

祇李王ノ心ハ良史ニ在リテ、六經ニ及ブニ遑アラズ。不佞ハ乃チ諸ヲ六經ニ用フ。異有リト爲スノミ。(學則附錄、答安澹泊書)

と云い、

李攀龍・王元美ハ、僅カニ文章之士爲リ。不佞ハ乃チ天之寵靈ヲ以テシテ、六經之道ヲ明ラカニスルヲ得タリ。豈大幸ニ非ズヤ。(徂徠集卷二十二、與富春山人)

と云っているのはその証拠である。然らばその主張する古文辭説の内容は如何。

(1) 合一説

古今ヲ合シテ之ヲ一トス。是吾ガ古文辭學ナリ。(徂徠集卷十九、譯文室蹄題言十則)

故ニ華和ヲ合シテ(而)之ヲ一トス。是吾ガ譯學ナリ。(同右)

誦スルニ華音ヲ以テシ、譯スルニ此ノ方ノ俚語ヲ以テシ、絶エテ和訓廻環之讀ミヲ作サズ。讀書ハ速カニ和訓ヲ離ルルヲ欲ス。此則チ眞正ノ讀書法ナリ。(同右)

(2) 経学と詩文の兼修説(前述、李・王批判の第一)

(3) 辞と法の具在説

夫レ六經ハ辭ナリ。而シテ法モ具在ス。(學則附録、答屈景山)

(4) 詩論に於ける情意二者は最上乘という説

夫レ盛唐ハ格ヲ主トシ、中唐ハ情ヲ主トシ、晚唐ハ意ヲ主トス。……見ル可シ情意ノ二者ハ、最上乘ニ非ズヤ。

(徂徠集卷二十六、與江若水)

徂徠は経学も詩文も一流であつたばかりでなく、教育者としても一流で、門下から太宰春台・服部南郭・山県周南・安藤東野・高野蘭亭・宇佐美瀧水等一流の人材が輩出した。徂徠の詩風詩論について要約すると、次の二項となる。

1 明詩を鼓吹し、宋詩を排斥する。

2 明詩は、漢魏の詩を知り唐の詩を知る階梯である。

なお拙著「江戸時代の詩風詩論」の中篇第二章第二節其一「荻生徂徠」を参照されたい。

日本詠物詩

にほんえいぶつし 上中下三卷三冊。伊藤君嶺(名栄吉)選並びに編。江戸時代慶長・元和以来の詠物の詩を輯めた漢詩集で安永五年丙申(一七七六)に成り、翌六年丁酉の春に刊行された。詠物詩とは天地・自然を対象として詠じた詩で、二内容の構成の項で、その一部を明らかにする。所収の作者は、梁田邦美・孔文雄即ち日下生駒に始まり、森東門(名球)・小瀬良正に至る、作者百三十四名、作品五百四十五首を、二十六部に分類して収めている。「詠」の字は、題簽・序・凡例によると「咏」の字も使用されている。

一 諸本

㊦安永六版―国会・国会鸚軒・内閣・静嘉・大阪市大森・京大・慶大斯道・早大・東北大狩野・日大・日比谷東

京・岩国・豊橋・米沢興讓・高野山光台院・松宇・神宮・竹清・茶図成實・天理古義堂・田浅野・学

書言志

寛政一一版―島原

刊年不明―国会亀田・慶大・山口・刈谷・竜野・陽明

(国書総目録による)

底本は安永六年版の家蔵本を使用した。

二 内容の構成

開巻第一に「日本詠物詩序」があり、次に「凡例」、次に「作者姓名」、次に「總目」があり、本文となる。「總目」(日本詠物詩總目)によると、巻之一には十三部、天部・地部・山部より始まり、楽部・器用部・襪玩部に至る詩百九十三首を収め、巻之二には六部、第一の玉帛部は錢・古錢・錦を題とした五首を収め、第二の冠服部は雨傘・寒衾等、第三の飲食部は柚味曾・糍粑花・蕎麥麵等六部百七十七首を収め、巻之三には七部、第一の木部は松・羅寒樹・梧桐・頼桐柳・新柳・衰柳等、第二の草部は春草・金燈籠・芭蕉・雁来紅等、第三の禽部は鳳・孔雀・鶴・雁等、第四の獸部は象・虎・馬・牛等、第五の鱗部は竜・魚等、第六の水族裸部、第七の昆虫部等七部百七十五首を収め、総計すると二十六部五百四十五首となる。このうち、貞享・元禄時代以前の作品が十分の六乃至七、明和・安永時代に近いものが十分の三を占めると、清田儋叟の序に見えている。

三 編纂の目的意図

委細は凡例に示されているので、書下し文にして示す。

一 是の編の部分・題目は、一に清の俞長仁の咏物詩選の例に遵ふ。蓋し俞の選中吾が邦の未だ詳らかにせざる名物及び其の物有りて其の咏無き者は、今は並びに之を缺く。

一 是の編は咏物を以て編に命づく。故に物を主として詩を主とせず。之を要するに必ずしも佳詩を盡さず。蓋し重んずる所は此に在りて彼に在らざるなり。

一 俞が選は歳時の部を設く。而るに歳時は咏物之事に非ず。故に是の編は之を省く。且夫れ俞が選は、咏物を以て編に命づくと雖も、而れども各部務めて該博を事とし、駁雜汎濫し、咏物に純ならず、頗る選體を失す。余は敢て之に效はず。

一 俞が選は巧藝の部を設けて以て題畫を收め、諸技・奕棋・鞦韆・蹴鞠之類に及ぶ。是の編は省いて別に部を設けず。而して題畫は盡く各部の下に附入して以て披覽に便にす。畫梅は梅に附し、畫鶴は鶴に附するが如き是也。諸技・奕棋之類の如き、詩は多くは得ず。得るも亦佳ならず。故に今は略いて録せず。

一 花の部、俞が選は梅を以て首と爲す。而れども是の編は櫻を以て首と爲す。海棠之に次ぐ。蓋し吾が邦の稱ふる所の櫻は、所謂櫻桃に非ざる也。顧ふに其の穠芳豔麗なるは、實に百花に冠たり。故に今之を首に列す。近世辯を好む者、漫りに櫻を以て海棠の一種と爲し、或は垂絲海棠を以て之に充つ。詞人故を以て櫻を咏ずるに、海棠を題とする者往往これ有り。作者已に題に命づくるに、未だ遽かに改む可からず、姑く其の題とする所に隨つて、以て櫻の後に附す。或は海棠を以て直ちに海棠を咏ずる者も、又其の後に録す。讀者詩に照して之を辨ぜば、自ら明白ならん。幸に名物の混淆を以て訝るを致すこと勿かれ。

一 選中收むる所の詩人は、皆古今の名賢、而るに是の編敢て名を諱まざる者は、永く不朽を期し、且文に臨みて宜しく諱むべからざるを以て也。余が家祖・先人及び二叔の諱の若きは、別に友人に倩ひて之を填めん。

一 詩人の姓名字號は、編首に之を略載す。其の序次は世次を以てせずして、唯編中に見る所の先後を以てし、随つて之を列ぶ。其の子弟の父兄に先だつ者有るも、倫序の錯置を以て訝ることを致す勿かれ。

一 余が方外之友に六如上人なる者有り。詩を好み、嘗に是の選に志す有り。余與に之を謀らんと欲す。而るに上人東遊す。余不佞黽勉事を幹るも、寡聞淺識、博究するに由無し。固より知る、隋珠を遺て燕石を寶とし、而して嘲りを大方の君子に招くを免れずと云ふ。

安永丙申之春

伊藤榮吉識

四 編著者 伊藤君嶺

君嶺は号、名は榮吉、平凡社の「大人名事典」によると、字は士善、徳川中期の福井藩の儒者、本姓塩田、播州北条の人、伊藤錦里の養子となり、福井侯に仕え、寛政八年歿したとある。なお付言すると「熙朝詩薈(二)」卷六十九にその詩六首を収めている。其の他の著書は次の通り

一、自怡堂詩稿、三卷三冊、森嵩編、寛政五年(一七九三)序、同七年(一七九五)刊。所在、国会鸚軒。

二、君嶺詩草三卷、自怡堂文稿、明詠物詩選は目録のみ。

なお養父伊藤錦里(名縉)著「邀翠館集」五卷を編纂し天明五年(一七八五)に刊行した。所在、国会鸚軒。

大和風雅

やまとふうが 上中下三卷三冊。主一堂藏版。大和地方、即ち今の奈良県地方の作者の漢詩集。古くは奈良時代か

ら江戸時代までの詩を、同地出身の藤本惟恭(名敬)と寺尾子徳(名一純)が、共同で輯録した漢詩集で、安永九年庚子(一七八〇)に成り、同年に刊行された。

一 諸本

①国会鸚軒・内閣・京大・早大・東北大狩野・竜谷・大阪府・大阪府石崎・日比谷加賀・尊経・高木

底本には、国立公文書館内閣文庫本を使用させていただいた。

(国書総目録による)

二 内容の構成とその特色

書名が示すように、大和地方の詩人の詩に限られている。大和出身者は他国に在る者も皆載せているが、他州の出身者は大和に現在住んでいる者に限り、他州に移った者は省いている。作者の尊卑や年紀や存没などによる順序は考慮せず、集まるにまかせて、淘汰することなく構成されている。上世の詩に就いて云えば、皇太子や皇子の詩が初めにあつて、天皇の御製が後に収められている。たゞ僧侶の詩は下巻(第三冊)にまとめられている。

三 編纂の目的意図

作品は佳作のみを選んで輯録したのではなく、手許に集つたものを、手を加えず原作のまま刊行したものであるが、日本の詩賦の濫觴は大和であるという自負を抱いて作られ、将来も更に続集を編纂して、同好の士に贈る予定であつた。「大和に詩人無し」と謂われないうにしたいというのが、編纂の主要な目的である。

四 編纂者

(1) 藤本惟恭

伝記は未詳。名は敬。大和の人。「熙朝詩薈(三)」卷九十九に詩一首が収められている。

(2) 寺尾子徳

伝記は未詳。大和の人。

永 慕 編

えいぼへん 熊阪台州(又台州)編著。全一冊。詩文集。天明七年の序と天明八年の序があるから、成立は天明八年(一七八八)とするのが適當であろう。刊行も同年で、江戸日本橋通三丁目前川六左衛門藏版。後出の「永慕後編」参照。

一 諸 本

⑧天明八版―内閣(享和四版、後編二卷付一卷共三冊) 京大・岩瀬

寛政一三版―国会鸚軒・東大・東北大狩野・日比谷加賀

(国書総目録による)

二 内容の構成

最初に熊阪邦(号台州)と赤松鴻(号滄洲)撰の序、台州撰の「先考霸陵山人行狀」、松崎觀海(名惟時)撰の「霸陵熊阪君墓碣」があつて、台州の詩文となる。しかし台州の詩文だけではなく、巻頭の「二十境記」に次ぐ「二十境圖并詩」に例を取ると、先考霸陵翁の詩も、台州の詩も、その子盤谷の詩も収めている。

三 編纂の目的意図

編著者台州が先考の霸陵山人を永慕する目的で作られたことが、台州撰の「永慕編序」に明記されている。書下して示す。

永慕とは何ぞ。先考霸陵山人を永慕するなり。……昔先考既に世務を邦に委ぬ。而して志を丘壑に棲まはしむ。其の遊止する、丹露盤・玉兔巖・長嘯嶺・龍脊巖・採芝崖・歸雲窟・將歸阪・狸首岡・隱泉・高子陂・不羈坳・拾翠崖・返照原・走馬嶺・白鷺峰・雩山・禹父山・愚公谷・白雲洞・古樵丘等有り。凡べて二十境なり。暇日に絶句を賦し、邦に命じて之に和せしむ。今にして之を誦するに、調は盛唐よりも純ならずと雖も、平淡閒雅、亦以て摩詰の輞川の什に比するに足る。

四 編著者 熊阪台州（又洲）

名は定邦、一名邦、通称宇右衛門、字は子彦、台州は号、別に曳尾堂・白雲館とも号する。台州の姓は、「永慕編」も「永慕後編」も「含錫紀事」もすべて「阪」を用いている。元文四年（一七三九）に生まれ、享和三年（一八〇三）三月二十一日に六十五歳で歿した。「平凡社刊大人名事典」によると、

クマサカタイシュウ 熊坂台州（くましかたいしゅう）（一七三九—一八〇三） 徳川中期の儒者。元文四年生る。名は定邦（略して邦の一

字を用ふ）、字は子彦、通稱は宇右衛門、台州と號した。陸奥伊達郡高子村の人。父を霸陵といふ。その家巨萬の富を有し、累世施を好み、同地方に於ける名望家であつた。台州資性穎敏にして、幼にして字を知り文を書いた。寶曆十年江戸に出て松崎觀海に學び、翌年京都に遊んで普く知名の士と交はつた。享和三年三月二十一日歿、年六十五。高子山中に葬らる。碑文は公卿清原宣光が撰し、烏山城主大久保忠成が書してゐる。著書には、信達歌、西遊紀行、文章結論、律詩天眼、白雲館詩眼、日雲館詩式、永慕編、永慕後編、含錫紀事などがあり、

何れも世に行はれてゐる。匿名を以て著はされてゐる『魚藍先生春遊江』も實はまた台洲の戲作するところだつた。(信達一統志 森)

「文章結論」の「結」は「緒」に、「日雲館詩式」の「日」は「白」に訂正すべきであり、なお「白雲館文罫一卷」は特色があるので、著書中に加うべきである。

台州は盛唐を中心とする唐詩鼓吹者であるが、明の李攀龍・王世貞が、盛唐を宗として復古を唱えたので、台州は明詩をも鼓吹した。格調説・性靈説・神韻説の内容について触れることは少ないながら、明らかに反性靈説・反神韻説であり、格調説の立場を執っている。しかし李・王の古文辞に対しては批判的であつたし宋の嚴羽の滄浪詩話を屢々引用主張した。筆者は台州の詩論を新格調説と仮称している。なお台州の伝記については、次の永慕後論に於て別の資料によつて記述するから参照されたい。尚『芸文福島』二号所収、菅野宏氏の論文「白雲館のひとびと」は大いに参考となる。

永慕後編

えいばこうへん 上下二巻、乾坤二冊。前出の永慕編を継ぐものである。卷上乾坤は熊阪邦(字子彦、号台州・曳尾堂・白雲館)の輯、卷下坤冊は熊阪秀(字は君実、一字君美、号は盤谷)の輯である。享和元年(一八〇一)に成り、享和四年(文化元年、一八〇四)に刊行された。台州の詩は乾坤には一首も収められず、坤冊にのみ「山齋牡丹十五首」「佳人篇十二首」「災後詩十六首」等が収められている。

一 諸 本

①国会・国会鸚軒・東北大狩野・日比谷加賀・刈谷・鶴舞・岩瀬・神宮

(国書総目録による)